

ぞく  
続

ちめい とうさくみんわ  
地名からたどる創作民話



豆辞典シリーズ 6  
作絵：やまおか みつはる

目 次

1. 与作の五十五人：宮城県  
(よさくのごじゅうごにん)
2. 地蔵の嫁娘：大分県  
(じぞうのよめっこ)
3. 峯の地蔵：大阪府  
(みねのじぞう)
4. 大飯くらの十郎：石川県  
(おおめしくらのじゅうろう)
5. 車力の清さん：青森県  
(しゃりきのせいさん)
6. 阿蘇をみはる行儀松：熊本県  
(あそをみはるぎょうぎまつ)
7. 烏殿と烏家老：愛媛県  
(からすとのと からすかろう)
8. 棒切れの中の観音様：新潟県  
(ぼっきれのなかの かのんさま)
9. 忠次郎と“あや”：徳島県  
(ちゅうじろうと “あや”)
10. 女が一番、男は二番：新潟県  
(おんながいちばん、おとこがにばん)
11. 「ツネ」に負けた水主神さま：香川県  
(「ツネ」にまけたみずしさま)

ここに掲載した地形図は、国土地理院発行のもの  
を使用しました。

## 1. 与作の五十五人

(よさくのごじゅうごにん)

宮城県石巻市(旧河北町)五十五人



むかしむかし、みちのく(いまの東北)のとある村に、与作(よさく)という、ちよっ

2

「ほー、与作ではないか」

「元気であったか」

「江戸は、どうかなー」

「たのしいか」

村のみんなは、与作の話す江戸のようすをねっしんに聞いたんだと。

「ところで与作、今は、どんな仕事をしているだか」

と、ともたちが聞くと。与作は、こういったんだと。

「今はな、材木問屋(ざいもくとんや)の番頭(ばんとう)をしているんだ」

「ふーん。たいした出世(しゅっせ)だ」

「出世だ！」

村人は、かんしんしたんだと。

それから、十年ほどたったじゃろうか。

与作はな、おとうやおっかあ、そして村の

と、気の弱いわかものが、すんでおったそう

な。  
与作はな、十五歳になると、ひとはたあげようと、江戸(えど)へ出ることにしたんだと。村をはなれるときには、おさななじみやきんじょのもんが、たくさん村はずれまで見送りにきてくれたんじゃ。

そこで、与作は、

「きっと、大きな店を持つほどに、せいこうしてみせるだ」

と、見送りのみんなにやくそくして、いさんででかけたそうな。

江戸へ出た与作はな、まじめにはたらいしたんだと。

十年ほどたったろうか。与作は、ある年の正月に、おとうやおっかあへのみやげをたくさんかかえて、ふるさとに帰ってきたと。

ともだちへのおみやげと、江戸の話をとくさん持って、雪がつもったふるさとに帰ってきたそうな。

「江戸は、どうかなー」

「江戸は楽しそうだなー」

「ええなー、おらも、えどではたらきたいのー」

やっぱりこの時も、村のみんなは、与作の話す江戸の話をとくさん聞いて聞いたんだと。

そして、また誰かが、

「ところで、与作は今、どんな仕事をしているだか」

と、聞いたんだと。

そうすると、与作はこういったんだと。

「今はな、五人ほどの手つだいのもんがいる、小さな材木問屋を始めただ」

「ふーん。たいした出世(しゅっせ)だ」

「出世だ！」

3

村人は、まえよりもいっそう、かんしんしたんだと。

それから、十年ほどたったじゃろうか。

この時も与作はな、すっかり年をとったおとうやおっかあ、そして村のみんなへのおみやげと、江戸の話をたくさん持って、ふるさともどってきたそう。

「江戸は、どうかなー」

「ええな、おらも、えどへでてはたらいてらよかったのー」

そしてこの時も、村のみんなは、与作の話す江戸の話を、楽しく聞いたんだと。

また誰かが聞いた。

「ところで与作、店の方は、どうかな…」と。

与作はこういったんだと。

「おらはな、今では五十五人ほどの手つだい

のものがいるの、材木問屋の“あるじ”になってな。おらも、いろいろ大へんなんだ」

「それは、大へんだ」

「大へんだ！」

「でも、大出世だの！」

と、村人は、だれもがかんしんしたんだと。

それから、さらに十年ほどした春だった。

与作はな、すっかりあたまの毛も白くなって、“ごいんきょさん”のようすになっていた。このときも、江戸の話と風呂敷（ふろしき）つつみをかかえて、ふるさとに帰ってきたそう。

ところが、この時の与作はちょっとつかれているようすだった。

つつみを広げることもなく、村のみんなに江戸の話をして、その日の夕方になると、少し横になりたいといっとな、そのまんま、静

4

かにあの世へ行ってしまったんだと。

「五十五人ものてつだいのものがいる、江戸の材木問屋の、ごいんきょさんがなくなったんじゃ、せいだいにそうしきをせばな」

といって、おさななじみや、近所のもの、いや村中の人が集まって、りっぱなおそうしきをしてあげたそう。

そして、村の中ほどにあるお寺の、もうなくなっていた与作のおとうやおっかあの墓（はか）にならべて、りっぱな墓石もたててあげたそう。

村のお寺にひっそりとたっているお墓は、いまでは「五十五人塚（つか）」とよんでいてな。ひとはたあげたいと江戸（東京）へ向かうものは、みんなここでおねがいして行くんだと。

そして、この村のことを五十五人とよぶんだとき。

ところがじゃ、与作の江戸でのほんとうは、こんなことじゃった。

村には、毎年のように江戸からやってくる、小間物（こまもの）をあつかう商人がたずねてきていた。村人はその人からも、江戸のようすを聞いていたんだな。もちろん、与作の店のことも聞いていた。

与作は、小ぞうのころから、あたまの毛が白くなるまで、江戸のたいして大きくもない材木問屋（ざいもくとんや）に、ずーとつとめていてな、ずいぶんくろうをしたけれど、さいごには、それはりっぱな番頭（ばんとう）さんになったんだと。

村人はだれもが、与作がくろうしていることも、やっこさ番頭さんになったことも知

5

っていたんだが、だーれもそのことをいうものはいなかったんだと。

そうそう、さいごにもちかえった、風呂敷つつみには、何が入っていたかって？

初めて江戸に出るときにみにつけていた、きものやはきものが入っていたそうなの。

風呂敷（ふろしき）を開けた村人は、「これをながめては、材木問屋（ざいもくとんや）でのとつめを、しんぼうしたんだろうな」といって、みんなでなみだをながしたと。

（08, 9, 10 更新）



宮城県石巻市（旧河北町）五十五人  
1/25,000 地形図石巻10号-3「石巻」

6

## 2. 地蔵の嫁娘

（じぞうのよめっこ）

大分県日田市（旧上津江村）熊戸



「地蔵の嫁っ娘（じぞうのよめっこ）」

むかしむかし、ある村のはずれに、小さなお地蔵（じぞう）さまが、あったそうなの。

その村は、まいとし秋のしゅうかくのじきになるとな、畑（はたけ）が熊（くま）にあらされてこまっていたんだと。

村人は、熊から、だいじなさくもつをまもろうとして、熊がだいすきな、はちみつを入れたわなを作り、まちかまえてみたけれど、どうしてもつかまえられなかった。

となり村から、てっぽううちをやとつてもみたけれど、うまくにげられてしまった。そのほかにも、いろいろためしてみたけれど、熊たいじは、どーも、うまくいかなかったんだと。

7

そんな村に、ほっぺがとっても赤い、かわいいむすめっこが、すんでいたんだ。むすめっこの名前はな、さよといったそう。

さよは、とてもすなおで、しんじんふかい子でな、村はずれのお地蔵さまを、たいせつにしていたんだと。まい日のように花をそなえては、おまいりをし、まい年のように赤いおべべを作りかえて、地蔵さまにきせていたんだと。

ある日のこと、さよは、村の人びとが畑のさくもつが熊におそわれて、こまっていることをきいたそう。

それからというもの、さよは、お地蔵さまに、「熊が、村の畑をいたずらしなくなるように」と、おいのりしたんだと。

そうしたある日のこと、さよがいつものように、「お地蔵さま、どうか村の畑を熊から

まもってください」というとな。お地蔵さまが、とつぜん、口をきいたそう。

「さよとかいったな、そんなに村の田や畑を熊からまもりたいか」

さよは、おどろくこともなく、しゃべったと。

「お地蔵さま、そうだあ。おらあ、いのちにかけても、この村の田や畑を、熊からまもりたいだ」

とな。

そしたら、お地蔵さまが、もういちど口をきいたんだと。

「わしが、山の熊にいいきかせよう。

でもな、その前にかわいいよめっこが、ほしいなー」

とな。

「ほんとうだか。

8

おらが、お地蔵さまのよめっこになってもいいだか？ そーせば、熊は畑をあらさねーのか！」

「そうだ、やくそくすると。でも、よめにくるときは、おっとうとも、おっかあともすっぱりわかれて、一人でここさ来なくちゃな！」

さよは村にかえると、おっとうと、おっかあに、この話をしゃべったそう。

「おら、お地蔵さまのよめっこになるの！」、そーせば、「熊はいたずらしなくなる」と。

この話をきいた村人は、

「それはちょっと、おかしいな」

「お地蔵さまが、そんなこというだろうか」などといって、さよが地蔵さまのよめっこになることを、やめさせようとしたんだと。

しかしな、お地蔵さまを心からしんじているさよはな、いくらはんたいしても「お地蔵さまのよめっこになるの！」と、きかなかったんだと。

あまりにも、さよが強くいうもんで、おっとうと、おっかあはあきらめてな、きいろいはなもようのついた赤いべべをきせて、お地蔵さまのところに、よめにやることにしたんだと。

さよは、やくそくどおり、村はずれのお地蔵さまのところに一人でくると、「おらさよだ。およめにきただ！」と、大声でしゃべったんだと。

すると、お地蔵さまは、うれしそうな声で、こういったそう。

「そうか、よめにきたか。よくきてくれたなあ。

9

それじゃ、ここからすこしのぼったところに立っている村さかいの一本松（いっぽんまつ）の先に、わしの家があるから、そこへ行ってまってくんろ」

「はい、おら、めし作ってまってるから、お地蔵さま、仕事おわったら、はようにかえってきてな」といって、さよは、いわれた家にむかったんだと。

ゆうがたになってな。

やくそくの家へつながる道には、お地蔵さまの後ろでしゃべっていた、となり村のいたずら者、三次郎(さんじろう)がいたんじゃ。「しめしめ、きょうからさよが、おらのよめっこだ。

さよは、なんにも知らないで、めし作ってむかえてくれるはず、うれしいな」

10

その三次郎が、少しのぼりさかになった道をとぶようにしてあるいているのを、松(まつ)の木のかげから、一とうのすこし年をとった熊がみていたんだと。

「わ——」

それは、あっというまだった。

三次郎は、その熊におそわれてな、しんだように、気をうしなってしまったそう。

三次郎の顔をなめた熊は、そのときながれてきた、いいにおいにつられて、三次郎のことはそのままに、さよがいる家の方へはしつたと。家の前にくると、熊は二本足で立ち上がり、家のとびらをたたいたそう。

地蔵さまのかえりを、いまか、いまかとまっていたさよは、「お地蔵さまー、まっていただよ、めしのしたくして！」

といって、いそいで戸をあけた。

そこにいたのは、大きな熊だったが、さよはおどろかなかった。

「そうかあ、お地蔵さまは、熊のうまれかわりだったか。おら、きょうからお前さんのよめっこだ。なんでもいってけれ。いうこときくだから。

「そうだ、ふろもいぐあいだが、めしにするか、ふろにするか」

ちっともおどろかない、それどころかやさしい声をかけてくれるさよに、熊のほうが、びっくりしたんだと。

それでも熊は、さよがよういしたふろに入り、夕ごはんをたべて、これも、さよがよういした、ねどこで横になった。

少し年をとった熊は、なみだがとまらなくて、とてもねむれなかった。小さいときに、

おつかあの熊とはなれてからこれまで、やさしい声をかけてもらったことはいちどもなかった。森のだれかにしんせつにしてもらったこともなかった。ずーっと、ずーっと、ひとりぼっちだった。

さよのやさしさに、かんげきした熊はな、さよが目をさまさないように、赤いほっぺをいちどだけ、しずかになめてから、こっそりとねどこをぬけだして、山さ、かえっていったんだと。

それからというもの、この村では、秋になって熊が戸をたたくと、

「お地蔵さま、まっていただ、さよは、きょうからおまえさんのよめっこだ。なんでもいってけれ。いうこときくだから」

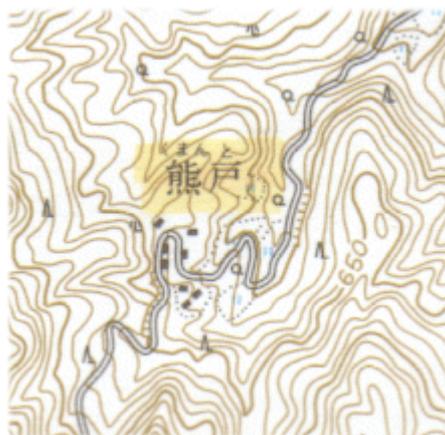
と、むすめの声でいうと、熊は山にかえって行くんだと。

11

さよは、どうしたかって。  
そうさな。

松の木のちかくで気をうしなっておれていた、あの三次郎は、よくあさ早くに目をさましてな、のこのこと、さよのねている家へ帰ってきて、それまで熊がねていたねどこに入って、すっかりねこんでしまったんだと。

そのあさ目をさました二人は、なにをしゃべったろうかなあ。それは、だ一れもしらないことだったが、そのあと二人は、いつまでもなかよく、くらししたんだと。(08.09更新)



大分県日田市(旧上津江村)熊戸(くまんど)  
1/25,000 地形図熊本2号-2「立門」

12

### 3. 峯の地蔵

(みねのじぞう)

大阪府泉南郡岬町峯地蔵



大阪の南、岬町(みさきまち)というところ。その、となり村へ向かう山道のとっぺん

に“峯の地蔵(みねのじぞう)”とよばれる地蔵さまがあつてな、こんな話があるそうな。

むかし、この村の山道のとっぺんに地蔵さまがひっそりと立っていたんだと。

その地蔵さんは、それはそれは、とてもかなしい顔をしていてな、村人の苦しみをかわりにうけてくれていたんだと。

村人もこのことをしんじていてな、病(やまい)になると峯の地蔵におねがいし、苦しいことがあると峯の地蔵にかわってもらっていたんだそうな。

ところがな、みんながこのお地蔵さんにおねがするもんで、お地蔵さんのその顔はいっそう苦しそうになり、それとはんたいに村人の顔は、しあわせいっぱい、ほがらかな顔になったんだと。

13

こうして、村人はけんこうになり、しあわせなるとな、峯の地蔵のことはすっかりわすれてしまったんだと。

そんな村にある日、爺（じい）さまのたびびとがやってきて、ものごいをしたんだと。

村人はな、この爺さまに、ほんの少しの食べ物にあたえたんだ。

ところがな、爺さまがあらわれたころからな、村人の中に、はきけがして、おなかがいたくなる、はやり病（やまい）が広まったんだと。

そしたら村人は、「このはやり病は、あの年爺さまのたびびとが持ってきたんだあ」といって、石をなげて爺さまを、おい出したんだと。

そのころからだあ。

14

はやり病の病人たちは、爺さまが苦しんでいる夢を見たのだと。

みんながみんな、

「爺さまが苦しんでいるー」

「河原（かわら）の石をどけてくれー」

と、ゆめを見てうなされたそうさ。

ふしぎに思った村人はな、みんなで村を流れる川の原にいったんだと。

そうすると、河原の木の下に、見たこともない、大きな石があったんだと。

「ふーん、この石のことだろうかの」

「これを、動かせということだろうかの」

ゆめを見た村人は、わけもわからずに大石を動かしたんだと。

その大石をひっくりかえしてみると、くるしそうな顔をした、あの峯の地蔵（みねのじぞう）があらわれたそうさ。

お地蔵さんを引き上げ、きれいに洗うとな、おなかのところに大きなきずがついていたんだと。

「お地蔵さん。いたかったろうの」

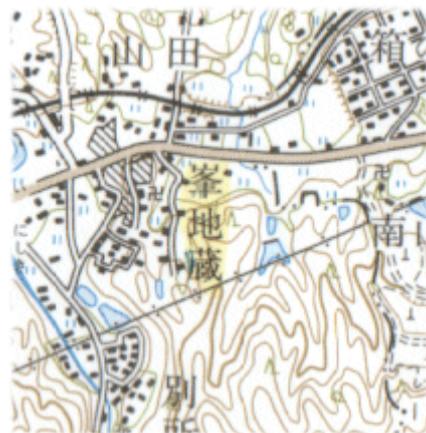
「こうずいで流れてきたんだらうかの」

「かんべんしてくんろ！」

村人はな、地蔵さんを、もとの山道のとっぺんにもどし、今までどおり大切にしようじゃ。それからしばらくすると、はやり病はぴったりとおさまったんだと。

いま、あの峯の地蔵さんはどうなったじゃらうかの。すこしだけ、苦しそうな顔で立っているじゃらうて。

岬村（みさきむら）の人びとの気持ちはどうじゃらうかの。きっと、今もしんじん深い、やさしい人びとでの、しあわせじゃらうて。



大阪府泉南郡岬町峯地蔵（みねじぞう）  
1/50,000 地形図和歌山15号「和歌山」

15

#### 4・大飯くらの十郎

(おおめしくらのじゅうろう)

石川県鳳珠郡能登町(旧柳田村) 十郎原



そのむかし、能登(のと)のおく深くに、ひときわ高い山があったと。その山は、能登から海をへだてて見える、となりの国の越中(えっちゅう)の立山(たてやま)よりも高い山であったそう。

16

声ばかりで、はたらこうとしない十郎に、ほんとうにこまっていたそう。

こまったオカアはな、村の入り口の小さな”ほこら”に、まつられた原の神様におねがいをしたそう。

「原の神様、どうか十郎の大飯くらをなおしてくんろ。それとも十郎に十分の食べ物がさずかるようにしてくんねえかのお」と。

ある日、はらをすかしてねていた、十郎のまくらもとに、手のひらにのるほどの小さな”てんぐ”があらわれての、耳もとでこういったんだと。

「十郎よ、はらいっぱい飯(めし)が食いたいかの。」

もちろん、十郎はこういった。

「おおー、はらいっぱい飯(めし)くいたいだ。」

小さなてんぐは、耳のそばで、続けていっ

そのころの能登はというと、冬になると北風が強一くふいて、それがこのびょうぶのように立ちのぼる大山にあたってな、北からは海風、山からは“大山おろし”と、村人はおおじょうしていたんだと。

そのふもとの村に、十郎という若者がいての、それはそれは大飯(おおめし)ぐらいであつたが、たいそうカもちでもあつたんだと。

でも、力持ちというのは、十分に食べ物があつたときのことで、はらをすかしているときは、たんなる“でくの坊(でくのぼう)”でしかなかったんじゃ。

十郎のオカアはな、その大飯くらいに、ほとほとこまっていたんじゃ。

特に、食べ物が少なくなる冬には、「はらすいたア、オカアなんか食べ物ないか」という

たそう。

「それならな、良いことをおしえてあげようぞ。能登(のと)の大山の下にはな、食べ物がたくさんうめられている。ほり返してみなされ、きっと、はらいっぱいになろうぞ。」

はらをすかした十郎は、のこりの力をふりしぼって大山にのぼると、これも力をさらにふりしぼって岩をほり返したんだな。そうすると、下から食べ物が出てきたんだと。

その食べ物を食べると、耳もとにこんな声が聞こえたんだと。

「岩の下には、食べ物がたくさんうめられている。ほり返せば、はらいっぱいになろうぞ」

少しはらがふくらんで力がついた十郎は、こんどは山の大岩を持ち上げてはな、北の海めがけてなげたんだと。なんどもなげている

17

と、また下から食べ物が出てきたんだと。

その食べ物を食べ終わると、また、小さなあの声が聞こえたそう。

「岩の下には、食べ物がたくさんうめられている。ほり返せば、はらいっぱいになろうぞ。」

食べ物という言葉に、がまんができない十郎は、岩山を持ち上げては、海になげすて、またまた食べ物を手に入れたんだと。

これをくりかえしていた十郎も、日がくれるころになると、さすがにつかれての。大岩を持ち上げて遠くへなげつけようとしたんだが、足をすべらせて、大岩はとんでもないところに飛んでいったんだと。

こうして、十郎が日ぐれまで大岩をちぎってはなげしているうちに、あのびょうぶのように立ちはだかる大山はあとかたもなくなっ

18

て、平らになったんだ。

今では、大山のあったあたりを“十郎原”とよんでいて、“大山おろし”の強い風もふかずに、村人はよろこんでいるそう。

そして、あの十郎が投げた大岩ののこりが、輪島（わじま）の北のおきにある「七ツ島」なんだと。

さらに、さいごになげそこなった大岩はな、東の珠洲（すず）の海岸にある「見附島（みつけじま）」なんだとさ。

十郎は、どうなったかって。

そうだな、すっかりはらいっぱいになった十郎はな、村へ帰ると春までねていたそう。

そして、その年から、村には強い風もふかずに、たくさんの作物が取れるようになってな、十郎はよくはたらき、村人からもしたわれて

な、一生はらへらすこともなく、くらしたそう。



石川県鳳珠郡能登町（旧柳田村）十郎原（じゅうろうばら）

1/50,000 地形図輪島8号「宝立山」

19

## 5. 車力の清さん

（しゃりきのせいさん）

青森県津軽市車力町



ある村のはずれに、清右衛門（せいえもん）という魚売りの男がおったそう。

清右衛門は、“にぐるま”に魚をのせて村じゅ

うをめぐって売りあるいた。

その清さんが売る魚はいつもしんせんで、村人にとてもよろこばれ、村人は清右衛門のことを「車力の清さん(しゃりきのせいさん)」とよんでいたそう。

この日も清さんは、北の村から魚をつんできてこの村で売り、帰りにはこの村でとれた野菜をつんで帰るつもりだったんだと。

ところがな、その日はとても暑い日であった。村までの道のりのとちゅうでなんども井戸の水を魚にかけ、日かげ道をえらんでは村に向かったんだが、はこんできた魚の大部分が、いたんでしまったそう。

そいでもんでな、その魚は売れなかったんだと。

清さんは、野菜をかうこともできなかった。

20

「私たちの村へ、帰ろう」

「帰ろうよ」

たくさんの者が口ぐちにいう、そんな声が清さんの耳もとで聞こえたかと思うと、木の下でねころんでいた体がういたような気がしたんじゃ。

清さんの体はどんどん空に向かっていき、魚を売って歩いていたあの村が、はこにわのように小さく見えるほどになったんだと。

そして、まわりをよーく見ると、たくさんの魚が清さんの体を持ち上げていた。

魚と清さんの体は、その村の上をすぎ、畑の上をとおり、海の上までくると、こんどは体をささえていた魚たちが、いっせいに海をめざして、おちていったんじゃと。

そのとき、清さんの体はというと、なぜか

21

でも清さんはな、それよりも、たくさんの魚をくさらせてしまったことをくいていたんだと。

「ごめんな、ゆるしてけろ」

「やく立たずの魚にしてしまっ…、ゆるしてけろ」

いたんで売れのこった魚たちに、やさしい声をかけ、少しだけなみだを流した清さんは、村はずれの大きな木の下で、とほうにくれていた。

清さんはつかれて少しねむってしまったようだった。いつしか森の向こうに夕日が落ちそうになっていた。

その時どこからともなく、声が聞こえてきた。

「帰ろう」

ふんわりと天にあっての、魚たちがしだいに海をめざしておりていくのが見えたそう。

「清さん、さようなら」

「ありがとう、清さん」

という声が聞こえたような気がした。

でも、清さんの目に見えた魚たちは、青白い元気のない色をしていて、暑さでいたんでしまった魚たちのようだったんじゃと。

しんせん魚として、村人に売ることができなかったことを、ざんねんに思っの。

清さんは、海へおりていく魚たちにもう一度いったそう。

「ごめんな…、二度といたんだ魚になんかしないから、かんべんしてけろ」

そういいおわったとき、清さんの体は、あの村はずれの大きな木の下にあったと。

「ゆめだったのかの一」

清さんは、大きな木の下から、すぐに立ち上がるとな、にぐるまの上の魚を入れる木ばこをのぞいたんだが、その中には、あのいたんだ魚は一びきもいなかったそうなの。

「ゆめだったのかの一。でも、魚を売るおれに、なんであの魚たちは、ありがとうっていったんだろう」

清さんは、ふしぎに思ったと。

あの魚たちは、清さんのやさしい言葉にかんしゃしていたんだな。

清さんとはいうと、それからもにぐるまを引き、いっしょうけんめい魚売りの仕事をしたそうなの。そして、大きな木の前になると、あのたくさんの、いたんだ魚のことを思い出しては、手を合わせたんだと。



青森県津軽市車力町（しゃりきまち）  
1/25,000 地形図青森 1 1号-3 「車力」

22

## 6. 阿蘇（あそ）をみはる行儀松

（あそをみはるぎょうぎまつ）

熊本県阿蘇郡高森町行儀松



たくさんのむかしのことじゃった。

阿蘇（あそ）の南のふもとに、木こりたちがくらししている村があった。

そのころの阿蘇山は、雲の先にあるてっぺんから、村のものがすむふもとまで、うっそうとした木におおわれた山であったんだと。

その中の、いっけんの家に”あすま”という子がいてな。お父さんやお母さんに愛されて、元気にそだてられていたんだと。

十歳になると、村のものといっしょに阿蘇山へ上っては、木を切り出し、材木にする、木こりの仕事をてつたうようになったそうなの。

まい日のぼる阿蘇への道の入り口には、松の木があつてな、その下には小さなほこらがあつたんだ。

あすまは、まい日その前になると、きまつ

23

ておまいりをしたんだと。

「お父さん、お母さんが病気をしないで、いつまでももと気でくらすませますように」とね。

そうしたある日、近くの松（まつ）が、とつぜんしゃべったんだと。

「あすまくん、阿蘇山の松は、のこり少なくなった。まい日のように友だちがいなくなる。

きみが、お父さんやお母さんのことを心配するように、ぼくはちょうじょうに近いところにすんでいる、私のお父さん松やお母さん松が心配だ。どうか、これ以上、木を切るのをやめてほしい。それとも、若い木がそだつまで、切り出しを休んでほしい。」とね。

もったもだと思ったあすまは、村の木こりなかまに、このことをつたえた。なん日も、なん回もね。

24

らの松にまで目をつけるようになった。

あすまは、ひっしにしていこうした。

「だめだ、この松の木だけは、切ってはいけない。かんべんだから、切らないで！」

あすまのひっしの言葉に、なかまの木こりたちは、しかたなくほこらの松をのこしてまわりの木を切り出してしまったんだと。

そんなある日、あすまが、ほこらの前にくると、ほこらの松（まつ）がいったんだ。

「あすまくんありがとう。ぼくのお父さんはもう切りたおされてしまったけれど、のこされたぼくが、これからまい日、木をふやして、阿蘇を緑いっぱいにする」とね。

「ごめんなさい、なんにもできないで」

あすまは松の木をだきしめて、声を聞き、いっしょにないたんだと。

でも、だれひとりとして聞いてくれる人はいなかった。

「そんなことで、木こりがつとまるか」

「木こりが、木を切り出さないで、明日からどうやって、めしくうだ」と、木こりなかまがいった。

あすまもしかたなく、今までどおり、いつもの道をおうふくして仕事に出かけた。

でも、あの松の下のほこらでは、いつものねがいことがいえなかった。いったとしても、合わせた手の下で小さくつぶやくだけだったんだと。

そばに立つ松の木のさびしそうな顔、かなしい声を聞くのがつらかったからだ。

しまいには、その道をさけて仕事に行くようになってしまったと。

そんなある日、木こりたちは、ついにほこ

それから、長い時間がたったいま、ほこらの松はかれてなくなってしまった。

ところが、阿蘇山にのぼる道のとちゅうには、大きな松があるんだな。

そして、この大松より高いところには、松の木は一本もはえていないのだが、それより低いところには、松がたくさんのこっているんだと。

ほこらの松は、あすまに話をしてからというもの、まい日、夜になると小さな松のえだをそこらじゅうに飛ばしたんだ。

そのえだが飛んだ先に、小さな松の木が、つぎつぎ生え、そだち、いまようになった。

そして、いのちがつきるころ、さいごに飛ばしたえだが、この大松になったという。

それからというもの、村のものは、この大

25

松のことを、ずーと「行儀松（ぎょうぎまつ）」  
とよんでいるんだと。

なんで、「行儀松」だかって、それはね、村  
のものがむやみに木や草を切らないように、  
高いところから、村人の行いをみはっている  
からなんだ。

あすまは、どうしたかって。

木こりの仕事は、まもなくやめて、木のお  
さらなどを作る職人（しょくにん）になっ  
てな、それこそ行いのよい大人になって、しあ  
わせにくらしたんだと。



熊本県阿蘇郡高森町行儀松（ぎょうぎまつ）  
1/25,000 地形図大分 15 号の 4 「阿蘇山」

## 7. 烏殿（からすとの）と烏家老（からすか ろう）

（からすとのと からすかろう）

愛媛県西予市宇和町烏殿



この村をおさめる大殿（おおとの）さまは、  
とても心のやさしい人じゃった。

雨が多くて、農作物のなにもかにもが不作  
（ふさく）のときには、もしものためにたく  
わえておいた米を、村人にわけあたえるよ  
うな大殿じゃった。

それだけでなく、不作のときには城下（じ  
ょうか）を見まわっては、農民（のうみん）  
や商人（しょうにん）に声をかけ、はげまし  
て歩くような人だったそう。

ある年のこと、村々はたいそうほうさくにな  
った。殿さまは、ねんぐとして、いつもよ  
り多く集まった米の一部を、いつものとおり  
に、くらにたくわえておくことにしたんだ。

ところが、つぎからつぎへと、はこばれて  
くるお米で、くらがいっぱいになってな。米  
蔵奉行（こめぐらぶぎょう）は、このことを

上の役人につたえたそうな。

これを聞いた家老（かろう）と若殿（わかとの）はな、大殿さまにはないしよで、あふれた米を売ること考えたんだと。

さっそく、商人をよび米蔵（こめぐら）からあふれた米を売った家老と若殿はな、そのお金で酒を飲み、歌をうたい、遊びほうけたんじゃ。

ところが、遊びはまいばんのことだから、そのお金もいつしかなくなり、二人は、また相談したんだ。

もちろん、くらの中の米を売ることがじゃ。

夜遊びは、また始まった。

米を売っては、夜遊びをする。また、わるい相談をするということくりかえしていた。

28

ところがじゃ、くらだしは、日ぐれから始まるから、鳥目のカラスにはよくみえない。こうげきはうまくいかなかったと。

なん日目の夜になると、またくらが開かれ、米がはこび出された。

「もう一、がまんができない」と、カラスたちは、米のはこび出しのちょうほんにんである家老と若殿を、ひるまのうちにこそうことにしたんじゃ。

シイの木にすむカラスが、くらのわきで相談をしている二人を見つけると、家族全員でおそった。

おそわれた二人は、意味もわからず、頭を手でかくしては、右へ左へとにげまわっての、やっこさ、城の中へにげのびたんじゃな。

そしてよく朝、二人は、なにかむずかゆい感じがして目がさめたと。顔をあらいにゆ

29

でも、悪いことはできないもんじゃな、それをじっーと見ていたものがいた。

くらの東のすみには、大きなシイの木があつてな。そこには、この城ができてからずつーとすみ続けるカラスの家族がいた。カラスたちは、出し入れのときに落ちる米を食料にしていたんじゃ。

きせつごとにくりかえされる出し入れでこぼれる米が、子カラスのえさとして、きちょうなものだったんじゃ。

カラスたちは、家老（かろう）と若殿（わかとの）さまのすることを、初めはじっーと見ていたんじゃが、「これでは、米がいききになくなってしまふぞー」と思うと、こらえきれなくなつてな。米のはこび手をおそうことにしたんじゃ。

き、おげにくんだ水の中のをぞくと、顔がいつもより黒ずんでいるようであつたと。

それでも、その日はなんとはなしにすごしたんだ。だが、きのうの相談が、とちゅうになっていることを思い出した二人はな、またくらのうら手に集まった。

するとまた、シイ木のカラスの家族が、おそってきたんだと。いちだんと強いこうげきに、二人は、おどろいて部屋ににげ帰ったそうな。

よく朝は、つめを立てたいほど顔がかゆくなり、色も真っ黒になってきた、そればかりか、くちばしのようなものがはえてきたんだと。体は人間、頭はカラスのようになってしまったんじゃ。

声さえも、何かガラガラといした感じになってきた。

もちろん、家老もじゃ。

二人はしだいに人前に出なくなり、顔をかくして歩くようになってな。山の城にすまいするようになったんじゃと。

それでも、どこかで顔をみられたのだろうかの、けらいや村人は、それぞれのことを「烏殿（からすとの）」とか、「烏家老（からすかろう）」とよぶようになったんじゃ。

そして、この村の人びとはな、その後もずーとやさしい大殿と若殿さまの下で、しあわせな生活を送ったんじゃと。

どうしてじゃろうな。

若殿さまはな、顔を洗うたびに、くちばしのある自分の顔を見てはの、あのときのことをはんせいして、すぐに、山の城から、ふもとの城にもどったと。

30

みにくい若殿の顔を見たけらいたちも、村人たちも、わるさをするものはいなくなったんじゃ。

そうなると、若殿のくちばしも、しだいに短くなり、声ももとおりになったんじゃな。

でも、顔色だけはな、黒くてたくましくなり、心は大殿（おおとの）さまのように、まっ白でやさしい人になったんじゃと。

いまでは、その二人がすまいしていた山の城があったあたりには、カラスをまつる神社があつてな、「烏殿（からすでん）」とよばれているそうな。



愛媛県西予市宇和町烏殿（からすでん）  
1/25,000 地形図松山 8 号の 4 「卯之町」

## 8. 棒切れの中の観音様

（ぼっきれのなかの かのんさま）  
新潟県柏崎市西山町礼拝・灰爪



31

そのむかし、冬には日本海のあらかなみが、「これでもか」と、いうくらいにうちよせる海べの村に、周作（しゅうさく）という、からだのよわい若者がおったと。

魚をとって生活するものが多いこの村では、周作のような漁（りょう）に出られないものは、一人前の男としてみとめられなかったんじゃ。

しかし、そうした村人の目とはかんけいなく、周作は、まいにちをゆったりとくらしていたと。

でも、としおいたとっちゃとかっちは、ねがっていた。

「なんとか、早く元気になって漁に出られる一人前の男になってほしいものだ」とな。

そんなことだから、周作のふだんのように、人の目からはゆったりとは見えていても、

心の中では、なんとかとっちゃとかっちはのきたいにこたえようとしていたんだと。

まいにちする浜（はま）べでのさんぽもな、からだをきたえるためにしていたんじゃ。

そんなある日のこと。周作は、浜べの砂（すな）の中から、小さなぼっきれ（：はしきれのこと）をひろった。手にとって見ると、周作にはやさしい女子（おなご）のすがたが見えたんだと。

「ほー、かわいい女子がいるようだ」

しかしな、とちやとかっちにみせても、まわりのだーれに見せても、女子に見えるというものはなかった。みんなの目には、ただの、ぼっきれだったと。

それでも周作には、そのぼっきれの中に、あるときは、えみをうかべた女子が、またあ

32

るときには、さびしそうなかんのんさまが、いるようにも見たんだと。

それからというもの周作は、このやわらかなかんじのするぼっきれを、はだみはなさずもち歩いたんじゃ。

ねむるときも、浜（はま）べをさんぽするときも。

そうすることで、心があたたかくなるような気がしたし、なにかしら、やさしいことばが、しぜんに口から出てくるようにも思えたんじゃな。

そんな人たちがすむ、しずかな村にも、ときおり強い北風がふくようになったある日のことだった。

漁に出た村のわかものたちの舟（ふね）が、夕方おそくになっても、いつものみなとにもどらなかつたと。

「おーい、おーい」

「あんちゃー」

「あんちゃー」

村のしゅうは、ある海にむかってさけんだそうな。

周作も、むねのぼっきれをおさえていのつた。

「ぶじでかえってくるように」と、いのつた。

そして、港（みなと）からはすこしはなれた、いつもの浜べにむかったときじゃった。

夕日が落ちて、はい色の空と海がせまっているはまべの水ぎわに、点々と黒い大きなものがあるのを見つけたと。

黒く見たのは、舟からなげだされた村のわかい漁師（りょうし）たちだった。

ふだんは弱々しい周作だったが、たおれている五人の男たちをみつけると、むちゅうで

33

浜（はま）の小さな高まりまでひきずり上げた。

さいごの一人までひき上げたときには、それより少し先まではこぶ力はもちろん、村まで歩いてしらせる力さえも、周作にはのこっていなかった。

太いうでと足をもつ男たちの中に、くずれるようにすわった周作は、何かにすがりたいきもちで、あのぼっきれをにぎって、むねからとり出したんじゃ。

すると、ぼっきれからは、ほんのりとあたたかさが感じられての。安心した周作は、しだいに気が遠くなっていくようだった。ぬれた周作の手が、ぼっきれからはなれた。

そのときじゃった。

ぼっきれは、ほのかな小さな光をはなちながら、しだいに、きいろのかたまりになって、かがやきはじめた。

34

「かんのんさま！」

だが、ぼっきれはなかった。

ただ、うす黒い灰（はい）があるだけだった。

周作は、まん中のいちだんと黒い灰を、ひとにぎりあつめると手ぬぐいにつつみ、ふところにおさめ、ぺこりとおじぎをして、そのばから立ちあがった。

それからというもの、周作のむねには、小さなふくろに入れられたあの灰が、いつもだかれるようになったと。そして、これまでとおなじように、ゆったりとくらしていたそうなの。

なん年がたっただろうか。

ひとなみに元気になることもなく、嫁子（よめご）をもらうこともなかった周作は、はや

35

光りは、小さなほのおになり、そして、はじめたんじゃ。

周作のからだはしぜんにうごき、むちゅうになって、まわりにある、かれ木をあつめては、ほのおにかさねていた。

あたたかなほのおが、見る見るうちにまわりをとりかこむと、男たちの中からうめき声がきこえてきた。

まもなく、男たちは気がついた。

元気をとりもどした、わかものたちは口々に、しゃべったと。

「ありがとう、周作」

「ほんとうに、ありがとう」と。

われにかえった周作はな、みんなのことばをきくのもおしむように、まだあたたかさがのこる火の中に手を入れて、なにかをさがしはじめた。

りやまいにかかり、さびしくしんだんだと。

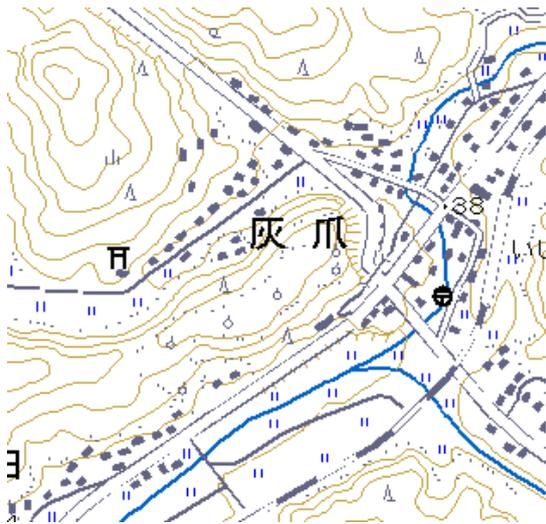
もちろん、あの灰（はい）ぶくろを、かかえたままな。

あの、あらしの夜のできごとへのかんしゃのきもちをこめて、おおくの村人（むらびと）が、一人前の男のそうしきにあつまったんじやな。

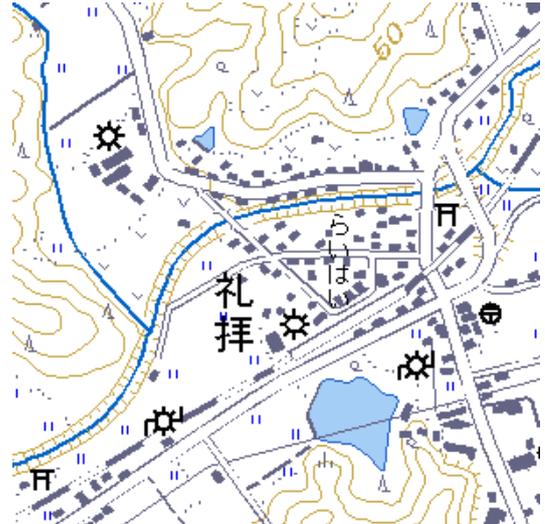
その時、村のひとたちが見た、よこになっている、やせほそった体の周作のそのまた細い手のつめさきは、灰がつまったようにくろぐろとしていたんだと。

そしていま、周作のおはかのあったあたりにはな、心やすらかな村人が、しあわせにくらしておると。

周作のことが、いまにつたえられているからだろうかの、ちかくには、「灰爪（はいづめ）」とよばれるところがあるそうなの。



新潟県柏崎市西山町灰爪（はいつめ）  
1/25,000 地形図長岡 8号の1「西山」



そして、新潟県柏崎市西山町には礼拝（らいはい）も、1/25,000 地形図長岡 8号の1「西山」

36

## 9. 忠次郎と”あや”

（ちゅうじろうと“あや”）

徳島県阿南市 忠次郎岬



阿波（あわ）の海岸近くの村に、忠次郎（ちゅうじろうと）という漁師（りょうし）がすんでいた。

その忠次郎が漁に出かけたある日、その日は、なぎの日だったのに、おきへ出ると、とつぜん海がうずまいての、そうなんしたそうなの。

どのくらいたっただろう、見知らぬ島の海べで気がついた忠次郎は、その島のものに助けられたんだと。

その後は、どこか知らない島の人びとにだいにされて、くらしていたんだ。

それから、三年もたったころだろうか。

忠次郎は、島一番のおとしよりに、そこで知りあった”あや”という島の娘（むすめ）をつれて、ふるさとの阿波の村へ帰りたいたいとお願いした。

おとしよりは、あやの気持ちも聞いてみな

37

ければならないから、少し考えさしてくれと  
いったそうだ。

そのばん、あやはおとしよりによばれたん  
だと。

あやは、話を聞いて、忠次郎といっしょに  
行くことにしたんだ。

そのとき、おとしよりから、きつう一、あ  
ることをやくそくされたそうなの。

そして、忠次郎は阿波（あわ）に帰ってき  
た。あやといっしょにな。

忠次郎は漁に出て、あやは家事（かじ）に  
せいを出し、しあわせなまい日だった。

あやは、食べ物の好き、きらいがはげしく、  
野菜はまったく口にしなかった。そういえば、  
島での食事も、魚と海草などが多かったな一  
と、思っては見たものの、忠次郎はあまりふ

38

しだいに、おなかが大きくなり。おさんが近  
づいた。

あやは、さいごにもう一度忠次郎に、たの  
んでみたんだ。

だが、聞き入れてくれなかったんだと。

その夜のことであった。

あやはこっそりと家を出て、村をぬけて港  
の入り口にある、みさきに出かけた。

ちかごろのあやを見て、気にかけていた忠  
次郎はな、こっそりと後をつけたんだと。

あやは、みさきの先にきて、遠い島の方が  
くに向かってひざまずくと、大きな声でなき  
だした。

そして、こうつぶやいた。

「おかあさん、あやはしあわせ。忠次郎さん  
にやさしくしてもらって。だから、どうして

39

しぎにも思わなかった。

忠次郎といえば、「村の太助（たすけ）のと  
こでは、男の赤子が生まれた」「治平（じへい）  
のところでは、女子が生まれた」と、うらや  
ましそうに話すんだと。

そんなある日、あやは「子ができたみたい  
よ」と話したんだ。

忠次郎は大いによろこんだ。

ところが、しだいにおなかがふくらんでく  
るとな、あやは、「子は島へ帰って生みたいの」  
というんだな。

そうすると、忠次郎はこういったんだ。

「どうしても家さ帰りたいたら、子をぶじに  
うんでから、ひとりで帰れ」とな。

それを聞いてからというもの、あやは、ね  
むれない夜をなんどもすごしたようだった。

も、私が・・・だなんていえないし、いって  
もいけない。

それに、ほんとうはこどもができていない  
ことがわかったら、忠次郎さんにすてられ  
る・・・」、そして、こう続けた。

「かんべんしてね、島のじいさま。『村のほん  
とうのことをいってはいけないよ』、というや  
くそくは、まもったのですが、『けっして、う  
そをいっちゃいけないよ』というやくそくは、  
まもれなかったの」

「あや？、いまなんていったんだ」

忠次郎が小さく、つぶやいたとき、あやが  
ふり向いた。

「ごめんなさい、あやは、あなたに助けられ  
た海人（うみびと）のむすめです。どうして  
も、人間のこどもを生むことはできません。

ゆるしてください・・・」

というのが早い、あやの体は、みさきの先からすいこまれるように海へ落ちていったんだと。

そののち、忠次郎はあやを思っの、まい日のように島の方向をながめては、みさきにたたずんでいたそう。

でも、忠次郎はな、子どものころに浜べで小さな海亀（うみがめ）を助けたことを、一度も思い出すことはなかったんだと。

いま、そのみさきは、「忠次郎みさき（ちゅうじろうみさき）」とよばれているんだ。

そして、あやの血を引くのだから、たまごをうむために、まい年この地方にやってくる海亀は、どれもが忠次郎みさきをめざしてくるんだと。

40



徳島県阿南市 忠次郎岬（ちゅうじろうみさき）

1/25,000 地形図剣山5号の2「橋」

## 10. 女が一番、男は二番

（おんながいちばん、おとこがにばん）

新潟県佐渡市畑野 男神山・女神山



ある村に、幸吉（こうきち）という若い百姓（ひやくしょう）がおったそう。

ある日のことじゃった。

その日は、おかあが用たしに出かけたこと

もあり、幸吉はのんびりと畑仕事をしていたんじゃ。

「さーて、ひと休みするか」といっの。しばらく畑に横になっているとな。しりの下の方からさわがしい音が聞こえてきたんだと。「女子（おなご）の声かなー、歌声かなー、楽器（がっき）の音かの一」

幸吉はふしぎに思いながら、畑の土に耳をおしつけてみると、やっぱりな！ 女子（おなご）の声、そして歌声も楽器の音も聞こえたんだと。

その夜のこと、幸吉は村のよりあいのせきで、この話しをしたんじゃ。

「そーんな、ばかな話はないだろうに」

「ひるねでもして、夢でも見ていたんだろうて」

41

でも、幸吉があんまり、しつこくいうもんでな、野菜のたねまきでいそがしいじきだったが、

「それじゃ、いってみるべー」ということになっての。次の日に、みんなで幸吉の畑さ、いくことになったと。

そして、村の男ものは、しゅうかくした大根のように、畑に体をならべて、地べたに耳を近づけたんだと。

「女子の声が聞こえる、歌声もきこえる」

「美しい女子の声だ」

「楽しそうだの」

みんなが、つぎつぎと地べたに耳をつけたしゅんかんのことだった。

「ど、どどー」と地がわれてな、男たちは、一人残らず地のそこに落ちたんだと。

「わー」

「わーああー」

まっくらなそこに落ちてみると、ひとりのむすめっこもいなかった。

土色をした、こわい顔の地の男（じのおとこ）がいてな、こういうたんだと。

「われたちの『地の畑』をたがやす者を集めていたのよ！」

「それにしても、女子たちはどうしただ」幸吉がいった。

「それはな、地の国から、ちょこっと声色（こわいろ：それらしい声をだすこと）を使うとな、いいぐあいにはんきょうしてな、地上では女子の声に聞こえるのさ」

「さーさ、このくわで、たがやしてもらおうかの。おかあにたのまれた畑をのー」

「これで、おれたちは、楽ができるのー」

そういわれて、村の男たちは、土の下に住む「地の男」たちに、きつうーにはたらかさ

42

れたんじやと。

こまったのは、はたらき手のいなくなった地上の村だった。なんとか男たちを助け出そうと、女たちは相談した。

大きく開いた穴のまわりで、歌をうたい、楽器を鳴らし、あまーい声を上げ、にぎやかにはやし立てみたんじや。

「ここは天国じゃ」

「食べ物も、酒もある」

「男はいないが、しあわせだー」とね。

これを聞いた、地の男たちは、「ふーん。食べ物も、酒もある、男はいない？」

「われたちのかわりに、女たちがはたらいてくれるのかのー」

あまりの楽しそうな声や歌に、地の男たちが、はしごをかけて、のそり、のそりと地上

にはい出してきた。一人、またひとり。

村の女たちは、上がったきた地の男に、あまい声をかけては、村のまん中にある古いおどうの中につれて行ったんだと。

ところがじゃ、そこには少一し目がつり上がった顔の地の女（じのおんな）たちが、まっいての、ひとり残らず首に縄（なわ）をかけて、地の国さ、つれもどしたんだと。

そのばんは、助けられた村の男たちも、つれて行かれた地の男たちも、それぞれの女たちに、しっかりしぼられたんだと。

「まじめに仕事せんかー」とね。

それいらい、この女たちは、「われたちがしっかりしているから、この村は平和なんだ」といっているんだと。

43

男たちはというと、「一步引いてな、女たちを神さまのように立てているからこそ、この村は静かなんだ」といっているんだと。

その言葉どおりにな、村ざかいにある二つの大きな山は、それぞれ「女神山（めがみさん）」、「男神山（おがみさん）」とよばれているの、女神山のほうがちょっと高く、それも村に向かって一步前に出ているそう。

もちろん、今では男も女も畑仕事にせいを出しているんだと。

「地などに、耳つけねでな」（08.11 更新）



新潟県佐渡市畑野 男神山・女神山（おがみさん約490m・めがみさん593m）  
（1/25,000 地形図長岡9号の1「畑野」）

44

### 11. 「ツネ」に負けた水主神さま

（「ツネ」にまけたみずしさま）

香川県東かがわ市（旧大内町）様松・水主



その村は、ぐるりを山にかこまれていたと。村には少ない田畑（たはた）しかなかったが、いっしょうけんめいこれをたがやし、村人は楽しくらしていたと。

ところが、この年の夏はな、雨が少なく、村人は水のやりくり、たいそうくろうしていたんじゃ。

上（かみ）の村には、水の流れが見えたが、下（しも）の村には、まったくというほど流れが見えなかった。

そんなときだった、大きなイノシシが山から下りてきての、村をあらした。まい日のように、村の田畑があらされた。

とくに、上の村にあるしょうやさんの、広い田畑が多くあらされたんじゃ。

で、村人は、みんなで山の入り口でさけんだそう。

45

「なんでもいうこと聞くだから、村の畑あらすのだけは、やめてくんろー」てな。

しばらく、くりかえしていると、イノシシの頭（かしら）だろうか、太一い声が森から聞こえてな、こういったと。

「人じちとして、若いむすめっこをだせー、若いむすめっこを村はずれの、やしろまでつれてこーい」とな。

村人は、相談したと。

「村に年ごろのむすめっこといえば、しょうやさんのところのツルと、下の村のびんぼう百姓（ひやくしょう）の太助（たすけ）のところのツネしかいないのー」

こんどのさうどうでは、しょうやさんの田畑は多くあらされたがの、太助のちっちゃな田はまだあらされていないかったんじゃ。太助

46

といったのだがの、聞こえたのか、きこえなかったのか、大イノシシは、「そうか、ツルか」といつての、こしをかついで山へ帰っていったさうな。

ところが、二日もすると、ツネは山からひょっこり帰ってきたと。

村人は、つれさられてからのようすを、なんども聞いたのだが、はっきりしなかったんだなあ。

それ以上に、ツネはなぜかさみしそうじゃった。

それでも、大イノシシは、それからしばらくあらわれなかったから、そのことはすっかりわすれられてしまったと。

この年は、もうすぐ秋がこようとするころになっても、雨が少なかったと。

しょうやさんの大きな田の、ずーと下にあ

の田は、それ以上に、少ない雨のせいで、ほんのすこしの水もとどいていなかったから、稲は少しもそだっていなかったと。

でも、集まった村人には、そんなことはどうでもいいことだった。

村人は、しょうやさんの顔をちらっと見ただけで、だーれも、なんにも、いわなかったが、太助のむすめっこのツネを人じちに出すことに、きめたんじゃ。

村人の代表は、太助の家さいて、話をし、いやがるツネには、さるぐつわをかませて、こしに入れて、村はずれのやしろの前においてにげたさうな。

しばらくすると、大イノシシがやってきての、こしに近づくと、こうしゃべったと。

「ツルか？」

さるぐつわをされたツネは、「いやツネだ」

る太助のちっちゃな田には、水はほとんど、とどかなかった。かれそうになった稲（いね）がひよろひよろとして、今にもたおれそうだった。

そんなある日、また、大イノシシがあらわれての。また、しょうやさんの田畑があらされて、だんなは大いにおこったんじゃ。

村人はといえば、前と同じようにの、「なんでもいうこと聞くだから、村の畑あらすのだけはやめてくんろー」とさけんただ。

大イノシシは、というと、「人じちのむすめっこをだせー、若いぴちぴちしたむすめっこを村はずれの、やしろまでつれてこーい」という声を、また返してよこしたんだと。

村のものは、しょうやさんが、なんにもいわなくても、「ぴちぴちしたむすめっこなら、

47

ツネだ」といって、こんどもツネを人じちに出すことにきめたそうな。

村はずれのやしろに、おきざりにされたこのまえに、大イノシシがやってきての、近づくと、「お前はツルか？」と、よびかけた。

このときツネは、人じちになることにすなおにおうじたので、さるぐつわはなかったから、「いやツネだ」とはっきりしゃべった。「そうかツネか、やっぱりツルはこなかったか？」

「イノシシさまは、この前も、私の顔を見るとすぐに私を村に帰したが、イノシシさまは、びんぼう百姓のむすめツネではいやか」

かなしそうに、ツネがいうと、大イノシシはの、こういったそうな。

「おれはの、ツネのことが気に入ってる。でもな、おれは、この川の水をつかさどる水

主神（みずし）さまの、たんなる使いでの、おれには、どうしようもないことだ」。

「ふーん、そうだったか。おら、イノシシさまの気持ち知って、ちょっと安心しただ」

「そして、これまでのことも、水主神（みずし）さまにいわれて、村人の気持ちをためすために、『人じちを出せ』といったのさ」

「イノシシさま、そうだったのか」

「水主神（みずし）さまは、水不足のときに、しょうやはどうするか？ 村にさいなんがおきたときに、村人はどうするかを、ためしてみたんだ」

「しょうやとむらのもんは、おらを人じちにだしたぞ？」

「でもな、水主神（みずし）さまは、人じちは、どーしても、しょうやのむすめツルでないとだめだといって、きかないんだ」

「ふーん、そうか。そのところを、なんとかならないのかの一。ぴちぴちのツネで！」

がっかりしたツネは、すなおにしゃべったと。

「なんどもいうがの、水主神（みずし）さまは、どーしても、しょうやのむすめのツルでなければなんないというんだ。

村人のためにぎせいはらう気持ちが感じられないとおこっている」

「こまったの一」

「それどころか、水主神（みずし）さまは、『この村のしょうや村人は、もうだめだ！もう、水不足から、この村を守らない』といっている」

と、大イノシシは、はっきりいったんじゃ。

それを聞いたツネはの、

「そんなこといわないでけれ、たのむから、私の大切な村と村人をまもってけれ！」

となんどもたのんだと。

でもな、水主神（みずし）さまの使いの大イノシシは、「それは、どうしてもだめなことだ！」と強くいったそうな。

これを聞いたツネは、心をきめた。

「水主神（みずし）さま！、わたしの体をさしあげますから、どうぞ村人をたすけてください」

というが早いか、大きな松のそばのがけから川へ身をなげたそうな。

あまりのとつぜんのできごとに、何もできなかった大イノシシはの、

「水主神（みずし）さま一、ツネのねがいを聞いてあげてくださいー！」

といってな、ツネがとびこんだ川の中に、「どぼん」と入っていったんだと。

と、どうじにツネの体はの、ぽっかりと水

面にうかんできての、いきをふきかえしたんじゃ。

しかし、ツネには、大イノシシのしたことは知らないことだった。

そして、しばらくすると、ツネと大イノシシが飛び込んだ川は、しだいに大きく広がり、そこにはため池ができたんじゃ。

びっしょりとぬれた体で、村にもどってきたツネは、これまでのことをみんなにしゃべったと。

話を聞いた、しょうやさんと村人たちは、大いにはんせいしての、そののちは、水をだいにじに使い、助け合っけくらし始めたそうな。

もちろん、ひでりの夏でも太助の田には水がくるようになったじゃ。

しょうやのツルは、どうしたかって。

これまでツルは、仕事もせずに家にとじこ

もっているの、おいしいものをすきなだけ食べていた。

その、どっしりしたすがたは、村人のだれが見ても、ぴちぴちのむすめにはみえなかったんだと。

しかし、このさわぎがあつてからは、畑仕事もてつだうようになっての、ツルもツネとおなじように、みちがえるほどぴちぴちのむすめになって、二人ともいいよめっこになったと。

さて、ツネが身をなげた場所に立つ、大きな松のことを、村人は「様松（ためしまつ）」とよんでいての、この話をつたえているそうな。

そして、大イノシシがあらわれたあたりを「水主（みずし）」というのだと。



香川県東かがわ市（旧大内町）様松（ためしまつ）1/25,000 地形図徳島 11 号の 4「三本松」



香川県東かがわ市（旧大内町）水主（みずし）1/25,000 地形図徳島 11 号の 4「三本松」



発行日：2006年5月  
著者：やまおか みつはる  
発行所：オフィス 地図豆  
定価（税込み） 500円（477+税）

**「オフィス 地図豆」**  
（店主 やまおか みつはる）  
〒300-1237 茨城県牛久市田宮 2-18-3  
tel：029-830-7511  
<http://www5a.biglobe.ne.jp/~kaempfer/>  
Copyright 2008 オフィス地図豆